

琉 球 大 学

(沖 縄 地 区)

実 施 報 告

(1) 実施責任者報告

琉球大学学生部長 金城 昭 夫

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

本学は昭和25年の創立当初から、大学における学術研究の成果を地域社会に還元するという、いわゆる米国のLAND GRANT COLLEGEの考え方に基づき、研究・教育の他に一般市民を対象とする公開講座を重要な機能の一つとしてとらえ、種々の公開講座（夜間英語講座、外国人を対象とした日本語会話、琉球文化史等国际普及講座、教職員を対象とする現職教育等）を沖縄本島及び離島において広範囲に実施してきた。さらに昭和61年度から従来の教室における公開講座に加え、放送利用の大学公開講座を実施している。

この放送公開講座も本学としては、上記のように大学と地域社会を結ぶチャンネルとして、地域社会への大学教育の開放という観点から位置づけしており、全学的に公開講座委員会を設置し、実施している。

また本放送公開講座はその地域の複数の大学により共同実施し、大学の授業に活用するということが研究のテーマの一つに上げられていることから、沖縄大学及び沖縄国際大学の両私立大学からも委員として各一名の教官が講座の企画、実施の審議に参画している。

なお、制作放送担当の放送局との協力関係が極めて円滑にあることはもとより、実施にあたっての地域社会への情報の周知及びスクーリングの際の人的、物的協力等に放送局、地元新聞、県教職員会及び市町村教育委員会、その他関係機関の協力を得ている。

2. テーマ選定とそのねらいについて

(テレビ講座)

昭和62年度は、医学部が担当するに当たり、医学的内容にしても、先進的な課題も重要であろうが、この度は沖縄の特徴を踏まえてテーマを選択することにした。

すなわち、沖縄は気候・風土など自然環境の点からも、他府県ではみられない、あるいはめずらしい医療上の課題を中心に、歴史的、社会文化的視点をまじえて選定した。第2次世界大戦後の沖縄の苦難な時代に如何に住民の健康を守ったか、医介輔地域駐在看護婦の活躍、精神衛生の特徴、ハブ咬傷、らいの話、減圧症、糞線虫症、百歳老人の科学、多発した先天性風疹症候群の教訓、ほか選ばれた各テーマは次代の医療保健の展開に無縁ではないと思っている。

そして、単に沖縄の受講生や県民にとどまらず、完成したビデオ番組を含めて、テキストが全国的にも利用され得る内容であり、沖縄の医療保健の理解を深め、認識を新たにして、今後の医療と予防医学の推進に役立つことを目指した。

（ラジオ講座）

沖縄県の戦後史と他府県のそれとの決定的な違いは、沖縄が戦後27年にもわたって米国の支配下に置かれていたことである。したがって沖縄県の現代史を知り、将来への展望を考えるうえで最も重要なことは、長期占領という歴史的体験を理解することである。これは、日米関係はもちろん国際関係を理解するにも重要な手がかりを与えてくれる。押し寄せる国際化の波に翻弄される日本の中で、沖縄県は逆に「本土」との一体化、画一化の方向に流されているのが現状である。このような時代に沖縄の戦後史を単に「負の体験」として忘れ去るのではなく、その意味をもう一度客観的に把え直し、それをプラスに転化することが将来への展望を主体的に拓くことにつながるのではないか、という視点から「沖縄の戦後史」をテーマにとり上げたのである。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

（テレビ講座）

番組とテキストは、それぞれの特徴を生かすべく努力した。番組においては、講師の説明と並行して様々な図表や標本、現場やインタビューをまじえて動きのある映像を多く利用するように努めた。また、テキストには、カラー写真の頁を設け、必要な参考文献を掲載した。

番組は、従来どおりアナウンサーの視聴者レベルにたった質問に講師が応えるような形で展開し、各回の冒頭と最後に、進行係による導入と締めくくり、並びに次回の予告を行った。

学習指導は、参加者の番組やテキスト記述の内容に関し、予習・復習として要点を説明し、質問に答える形、受講生や講師によって提起された問題に対して討論する形で行った。

（ラジオ講座）

ラジオという視聴だけに訴える媒体を通しての講義だけに、教材づくり及び番組制作には各講師とも未経験だけに苦労させられた。テキストの文章はできるだけ平易であること、図表や統計資料を効果的に使用すること等の点について留意するよう話し合ったが、結果的には必ずしも成功したとはいえないようだ。番組制作にあたっては、アナウンサーが受講者の代表として質問するという形式が効果的だと考えられたが、時間的な制約や講師のラジオメディアに対する不慣れなどから、質問形式は採用されず各自がテキストの内容を要約するといった形式になった。講師によって受講者が事前にテキストを読んだものとの前提に立って放送番組ではテキストで充分書き込めなかったことを補正するといった形式をとったものや、テキストを忠実にフォローするといった形式をとったものもあって、この点で統一を欠いた。

学習指導については、講師によっては番組の途中でアナウンサーが難解な用語について解説を加えるといったこともしたが、全体的にはいまひとつ工夫が足りなかったと思われる。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

（テレビ講座）

スクーリングを3会場、各3回実施したが、出席率は必ずしも満足すべきものではなかった。アンケートに応えた受講生の回答の印象は、この講座が積極的に受け入れられ、学習効果を上げたことがうかがえる。受講生以外の問い合わせも少なくなかったこと、視聴率も過去2回を上回っていたことなどから、この講座の狙いに近い受け止められかたが多いように思われた。

（ラジオ講座）

番組に対する関心は高いように見受けられたが、スクーリングの出席率は高くはなかった。テーマ自体が少々難しかったせいか質問は少なかったが、スクーリングにおける受講態度は熱心で、ノートもよくとった。

5. 印刷教材の制作過程について

（テレビ講座）

予め放送講座の狙いに関する認識を高めるための会合を持ち、また、原稿作成のマニュアルを作って配付した。原稿作成は一部時間的な遅れは出たが概してスムーズに行なわれ、開講に間に合わせることができた。印刷所が決った段階から、密接に連絡をとり、カラー写真の掲載などかなりの無理も聞いて頂き、良いテキストができたと考えている。またテキストに講座の連続番号を付し、「沖縄の医療と保健」は琉球大学放送公開講座6とした。

（ラジオ講座）

当講座に関する共有認識をつくるため、ミーティングを持ち、個々のテーマ及び執筆要領について話しあった。主任講師と編集責任者が夏季休暇中に海外調査にでかけたために、全体的に出稿が大幅に遅れたが、印刷所の献身的な協力で講座放送直前に製本を完成することができた。原稿の枚数については、各自30枚程度にまとめることになっていたが、実際には予定より10枚から20枚多くなった。

6. 学習指導の実施状況について

スクーリングは沖縄本島、宮古島、石垣島で3回実施された。参加者は決して多くはなかったが、概ね積極的な会議、討論が行われた。スクーリングの日時、形式についてはもっと工夫が必要ではないかと思われる。もっと回数を増やし、担当講師全員が自分の放送した番組について質問を受けられるような形式をとれば受講者の参加率も上がるものと思われる。

回	場 所	日 時	受講登録者数	出席者数
1	琉球大学教養部 平良市立中央公民館	(TV)62. 9. 20 13:00～15:00	158	73
		(R)62. 9. 20 15:00～17:00	79	37
	石垣市立文化会館	(TV)62. 11. 22 13:00～15:00	158	43
		(R)62. 11. 22 15:00～17:00	79	18
2	琉球大学教養部 平良市立中央公民館	(TV)63. 1. 22 13:00～15:00	158	30
		(R)63. 1. 17 15:00～17:00	79	17
	石垣市立文化会館	(TV)63. 1. 22 13:00～15:00	158	30
		(R)63. 1. 17 15:00～17:00	79	17

7. 「大学教育の地域社会への開放」の果たす役割について

本学の放送公開講座は、テレビ講座については沖縄テレビが番組を制作し沖縄本島地区の放送を担当し、宮古、八重山地区では、沖縄テレビが制作したVTRでもってそれぞれの地元の有線放送局が放送を担当している。

従来の公開講座は、場所、時間、募集人員等いろいろな制約があるため限られた地域の人々しかその機会を利用できず、特に離島の住民は、ほとんどその機会に恵まれず、また、本島内の住民も大半は、その恩恵を受けられなかった。これに対し、放送メディアを媒体とする本公開講座は電波が届く地域なら誰もが自由に視聴でき、またVTRを利用すれば反復学習が可能となる。したがって、放送利用の公開講座は「大学教育の地域社会への開放」をより広範囲に、かつ効果的に促進するという役割を担うものといえよう。

8. 「大学への授業への活用」の状況と今後の可能性について

(テレビ講座)

「沖縄の医療と保健」は12月末に放送が終わったばかりであるが、医学部の学生に対し、放送番組の視聴をすすめたところ、4、5、6年次の各段階に応じて、理解を深め学習意欲を刺激し効果があった。とくに6年次はビデオの再視聴を希望し、テキストの問い合わせがあった。

「沖縄の医療と保健」全体として、教養部の総合科目、また、医学部(医学科、保健学科)の医学概論として提供することもその一つ案であり、また部分的に個々の番組を他大学の専門科目のそれぞれの分野で、利用に耐え得るものと考えている。

(ラジオ講座)

執筆にあたっては大学の教養講座のレベルにするよう申し合わせたので、内容的には大学における授業にも活用できるが、現在のところ使用されていない。講義の録音テープは全巻大学に保管されていることになっている。音声だけなので、クラスで使用するのはむずかしいが、テキストに対する需要は大きい。印刷部数を増やして受講しなかった学生や一般の人々にも容易に入手できるようにしたい。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

(テレビ講座)

番組の作成について、昨年度も指摘されたことであるが、今回のようなテーマも番組の制作には、各番組収録終了時の1年程度前から準備にはいることが望ましい。放送局のビデオライブラリーや担当講師の資料の活用および番組制作スタッフ、担当講師、協力者および関連諸団体の適切な協力で約半年で対応できたが、ゆとりが少なかった。

不特定多数の一般の視聴者を対象にした、専門用語を分かりやすく説明すること、また話し方など適切に工夫が必要と感じた担当者もいた。アナウンサーの質問に応える形での番組の進行には、視聴者からおおむね受け入れられたものと考えている。

番組によっては一般の参加、例えばインタビュー形式による参加もあったが、収録に際しては協力的であった。

番組の提供に関しては、従来から言われていたように放送時間帯が早朝であることが一般の視聴を困難にしている部分があり、その変更の可能性について、今後とも検討が望まれる。

沖縄は離島が多く、民間放送が利用できない場所が多いため、沖縄本島以外での利用が困難である。この事は、前2回の放送でも指摘されたことであるが、沖縄県に多い離島における番組提供の方式については引続き再検討が望まれる。

受講生の指導についてはスクーリングの回数と会場を増やすこともふくめ、視聴者の直接指導及び討論などに一段と進んだ工夫が望まれる。また、電話等による若干の問い合わせはあったが、今回もテキストの市販を希望する声が多かった。スムーズに対応できるように検討が望まれる。

(ラジオ講座)

番組制作については、ラジオが音声だけのメディアであるため、もっと工夫が必要である。単にテキストをなぞるような講義形式ではなく、インタビュー形式も効果的だと思われる。これには、執筆段階から放送局側と講師との間で綿密な打ち合わせが必要であるが、今回は時間的に余裕がなく実現しなかった。放送時間は今回のように午後の10時頃が適当と思われる。スクーリングの日は日曜は避けた方がよい。土曜日の午後2時頃が最適ではないかと思われる。また、スクーリングは各講義について担当講師が受け持てばより効果的であり、受講者の学習意欲も高まるのではないかと。さらに、受講者の意欲を高めるためには単位を与えることも将来検討されるべきである。単に一般教養のための番組であれば必ずしも講義内容を大学1・2年のレベルにすることに拘泥する

ことはないのではないか。放送の目的と受講者のイメージが明確でないため、テキストの執筆がむずかしいとの声も担当講師の間に聞かれた。テキストの市販を希望する声強い。できれば放送終了後に加筆して市販できるような方法を検討してほしい。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 沖縄の医療と保健

主任講師： 医学部教授 平山清武

この講座は進行世話係が全体的構想にもとづく番組及びテキストの骨組を作り、医学部内の会合の折々に問いかけを行った。番組参加の意思表示を確認した教官を中心に最終的な公開講座の意図、スケジュールの調整を行っていった。関係教官、番組制作関係者および学生部各位の多大な協力で、一応のレベルの物ができたと考えている。

今回の講座は、健康への関心度は少なくないと考え、多くの受講者がでることを期待した。受講生は医療関係者より、一般の方が多く、この点テキスト内容の理解の難易度にばらつきが大きかったのではないかと考える。

テキストの出来は、カラー写真の掲載を採用し、一応のレベルに達していると考えられる。これをもとに改訂を加えてより充実したものとし、大学の講義に教材として使用する際、更に、良いテキストに仕上げるように出来ればと考えている。受講生以外からのテキスト購入希望者への対応の道が考慮されることが望ましい。公開講座から生まれたテキストがより広く活用される可能性があることを認識し、且つ対応する時期にきているのではないかとと思われる。

この放送公開講座は放送終了後も医学部内において、各担当講師がビデオを利用して随時利用を開始しており、更に範囲を広げて、他大学でも利用できるテーマもあり、今後の宣伝を考えている。

(ラジオ科目) 沖縄の戦後史

主任講師： 法文学部教授 大田昌秀

初めてのラジオ放送公開講座だったので、テキストの執筆には苦労させられた。とりわけ筆者は海外学術調査の為、7月・8月にかけて国外に出ていたこともあって、帰国後、原稿提出までの期間が切迫していて、ともすれば、固い論文調に陥りがちの文章をラジオ放送に相応わしい内容に書き改める十分な時間がなく、思うに任せなかったことが個人的に反省される。

他の講師たちの文章をも含め、総じてテキストは、著作向けの論文調のものが多く、放送向けの話し言葉としては、生硬な面が目立ち受け手には分かりにくかったのではないと思う。しかも、教室での講義の場合とは趣が違い限定された時間内で、意を尽くして話すことは、馴れていないせいもあって、個々の教師にとっても成果は必ずしも満足できるものではなかったようである。

「沖縄の戦後史」についてのテキストの構成も、今回は主として時間的制約から十二分に吟味し、工夫をこらすことができず結果的にオーディエンスの包括的な理解を妨げたように思われる。

このように反省すべき点は少なくないが、今回の公開講座は、個々の講師にとっては、極めて貴重な体験となったことは強調するに値する。この貴重な体験をふまえ、次回からは前期の反省点を改め、より望ましい内容の講座に作り上げていくことが可能だからである。その意味では、実施して良かったと思う。同時に受講者たちが、本講座を通じて沖縄の戦後史についていくらかなりとも理解が得られたことを願わざるをえない。

制 作 報 告

(1) 制作責任者報告(テレビ)

沖縄テレビ放送報道制作局制作部長 大 城 光 男

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

過去2年の制作経験上、テーマ・内容に関しては大学側に総て任せ、テレビ的に構成、演出を受け持つ姿勢で臨んだ。医学という特に難解な学問をより解り易く、かつ大学講座としての品位を保ちながら制作するよう3人のディレクターに指示して取り組んだ。今回のテーマは「沖縄の医療と保健」で、主任講師・平山清武教授は大学の講義として利用したいとの熱意を持って当方と意欲的に接触し、担当講師との窓口となって一年間苦心していただいた。

大学との協力体制については、学生部長の金城昭夫教授を中心に取り組んでいただき、今年度もスムーズに行われ、何のトラブルもなかった。これも大学側の綿密な計画、実施のたまものである。

民放電波の届かない離島、宮古、八重山地区では過去2年にならい、1インチテープから3/4インチテープヘダビングを行い、CATV2社を通して沖縄本島より1日遅れて放送した。

過去2年は民放が大学講座の制作という意外であるというイメージを持った視聴者も多かったが、3年目を無事終え、地域に琉球大学放送公開講座が浸透してきたと思う。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

難しい学問を易しく楽しく見せる番組を目ざして、ややもするとデータやグラフに頼りがちな講師の講義にVTRを数多く搜入する事を心掛けた。又、論文で他県の学者の引用があれば県外取材をできる限り取り入れた。

番組PRは契約以外にも制作独自で制作局独自で制作し、数多く宣伝を行った。

又、10月の放送開始を前に「受講生募集に向けて」のタイトルで30分の事前番組を作成し、受講生募集と番組宣伝を積極的に取り入れた。

3. 番組の視聴状況と成果(評価、反応)について

大学講座番組の制作は3年目を迎え、年々、地域への定着は向上していると言える。初年度が0.3%、次年度が0.5%、そして今年が0.8%と一定程度の向上が見られる。今後は放送時間等も含めて検討していきたい。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

今年度の担当学部が医学部で担当講師は休講中でさえも、患者の治療を受け持っており、それだけ制作担当者は講師とのアポイントで四苦八苦した。しかし大学側の熱意と制作担当者の努力で納

得のいく作業ができたといえる。今年度のテーマは「沖縄の医療と保健」13回にサブテーマが分れているが、どのサブテーマをとっても1回だけの講義で納まるものではなく多岐に渡ってはいるが、深さの面で若干もったいないと感じた。制作担当者は、構成のため打ち合わせを丁寧に担当講師と行っているが、やはり数多く時間をさいた講師の番組ほどわかり易く、今後は綿密な打合せの為何らかの方策が望まれる。その他、ビデオのコピーを要求する視聴者が多く、対応も検討課題である。

(2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) 沖縄の医療と保健

制作担当者： 沖縄テレビ放送報道制作局制作副部長 座喜味 俊 明

本講座の制作担当者が今年度は総入れ替えとなり、事実上初めての講座制作となった。沖縄は気候、風土、歴史など全国でもユニークな地域で、大学側から提出されたテーマは医療史、ハブ咬傷、伝染病、寄生虫とバラエティーに富み、私達制作担当者に大きな興味を抱かせた。当初、講座の原稿が出揃うのを待って講師と打ち合わせを行う予定であったが、医学部の先生方は学生への講義と同時に病院での治療を抱えているほか、勤務終了後に研究、休日は学会と中々スケジュールが空かず、原稿も遅れがちで前途多難に思われた。この為、方針を変えて台本構成を先に取り組む事を決め、講師との面会と同時に内容構成の打ち合わせ、取材日程を手早く決める方法を取ったところ、順調に番組制作が流れ出した。

講座内容が医学なので、中にはあまり映像になじまないテーマもあったが、できるだけ取材を多くしてよくわかる番組を目ざした。

講師の方々には、私達のうるさい注文にも我慢して受け入れて戴いた。特に主任講師は、多忙にも拘らず本人の希望とはいえリハーサル、本番と26日間も最後まで付き合って戴き、感謝に耐えない。

放送期間中、視聴者から「ビデオで分けてくれないか」「見逃したのでどうにかならないか」などの注文をいただき、制作担当者としてある程度の手ごたえを感じている。放送が終った今、あの時もっと詰めれば…などと反省材料も多く次回以降、講座番組制作の糧にしたい。

(1) 制作責任者報告（ラジオ）

琉球放送ラジオ放送部部长補佐 徳田 安則

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

正式の公開講座は今回がはじめてであるが、基本方針としては、大学側が決めたテーマ「沖縄の戦後史」について、講師の意向を充分伝える事と聴き手が分かりやすい番組を作る方針で臨んだ。

本土復帰15年目の節目で断片的には色々取り上げて来たが、このような総括的な番組は無く、局としてもタイムリーなテーマという認識であった。

収録から放送までの期間が短く基本方針を活かし切れなかったが、講師、事務局とも良好な協力関係が保てたと思う。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

「戦後史」という内容の問題、テキスト（原稿）の仕上がりの遅れ、編集時間の制約などがあってほとんど工夫をこらすことが出来なかった。

13回（12人の講師）のうち「ひとくちメモ」（女子アナ朗読）を搜入したのは2回のみで、残り11回はすべて講師の話だけになってしまった。

戦後史については、放送局の手持ちの音声もあったが、それを使用する事について講師との間で、十分な意見交換が出来ず反省材料となっている。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

日曜夜の9:15～10:00という時間帯なので、かなりの聴取があったと思う。（聴取率不明）

テキストを欲しいという電話が、放送開始後、数件あった。「聴講生ではないが、年表を繰りながら聴いている（男30代）。」

「帰省して聴いてビックリ。是非全部聴きたい（福岡 男20代）。」

「食生活の分だけでもテープが欲しい（女30代）。」などの電話があり、うちいくつかについては大学に相談して欲しいと伝えた。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

大学の講座という予断にとらわれず、制作者としても自由な発想で取り組む姿勢が必要だと思う。その上で講師と充分話し合い、レベルを落とすことなく、ラジオメディアとしての強みが発揮できる番組作りを考えたい。

今回、録り直しをした講師が多く、電波嫌いにさせてしまったのは残念。

(2) 番組制作担当者の所見

(ラジオ科目) 沖縄の戦後史

制作担当者： 琉球放送ラジオ放送部部長補佐 徳 田 安 則

放送人としてとびつきたいテーマであり、担当出来ることを喜んだが、こと志と違い、出来上ったのは必ずしも満足の行くものではなかった。

反省の方が先に立つが次回の制作の心構えとして記したい。

○事前の取り組みの重要性

- ・内容を充分把握し、少なくとも放送分については、講師との共同制作という位にまでかかわりたい。構成、言葉遣い、効果音等についても論議すべきだったと思う。
- ・聴取者への事前PRの強化。
- ・今回、局独自のスポットのほか、生番組で講師インタビューなどを行ったが、放送メディアだけでなく地元紙への強力なPR、官公庁、労組などの諸団体への接触を大学と協力して行う事。

○制作に当たっては、テキストの内容をさらに深めて理解する事が必須であり、不十分なままでは編集の時不安が残る。

大学教授といえどもスタジオでのしゃべりは素人であり、リハーサルを兼ねた「場慣れ」の機会が必要。

はじめての取り組みの上、主として講師の多忙の理由でテキスト仕上がりが大幅に遅れ、いきおい、制作時間に無理が来たこともあって、講師が原稿を読むだけという体制になったが、次回は、もう少し楽しんで作れるようになりたい。

講座の概要

＜科目の概要＞

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
沖縄の医療と保健 (テレビ)	沖縄の地理的、歴史的、文化的特徴をふまえた医療と保健について理解を深め、認識を新たにして、今後の保健・予防医学の推進の一役を担いたい。	沖縄－南西諸島－には心身の健康に影響を及ぼしている地理的、気象的また社会・文化的に特徴のある要因を指摘することができる。これら要因のなかから今日的なつながりをもつ課題をいくつか取り上げ、解説し理解を深め、健康の増進と保持、予防医学の推進に役立つことを目指したい。	沖縄で約300年前に行われた全身麻酔の話に始まり、第2次世界大戦後の医療環境をふりかえり、民間療法・地域精神衛生の問題、沖縄に多い疾病を取り上げて解説する。また長寿を考え、先天異常の予防について先天性風疹症候群を例として解説する。スクーリングについては、関連施設の使用も考える。
沖縄の戦後史 (ラジオ)	27年にわたる米国による統治を含め、沖縄の戦後史を多角的に把握し、その意味を問う。	戦後史を政治、経済、社会、文化の各側面から立体的にとらえ、その特異性を明らかにしながら、受講者に沖縄の戦後史の全体像を理解させる。	初回到戦後史の全体像を提示しその後、沖縄戦、米国の統治政策、住民の対応、経済政策、文学、意識変容、マス・メディア、基地問題、生活史等の各論に入り、最後に戦後思想史の流れ、及び戦後研究と沖縄学の関連について論じる。

<各科目の構成>

(テレビ科目) 沖縄の医療と保健

主任講師：医学部教授 平 山 清 武

放 送 回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 1 回	10月 3日	日本で最初の全身麻酔 －高嶺徳明の話－	医学部教授 奥 田 佳 朗
第 2 回	10月10日	戦後沖縄の保健医療行政の推移と展開	医学部助教授 平 照 宮 琉球大学名誉教授 良 屋 城 医学部助手 一 寛 重 彦 善 二
第 3 回	10月17日	医介輔と駐在保健婦の役割	医学部教授 崎 原 盛 造
第 4 回	10月24日	沖縄の民間療法 地域特性の精神衛生	医学部助教授 金 城 勇 徳 医学部教授 石 津 宏
第 5 回	10月31日	ハブ咬傷	医学部教授 茨 高 木 邦 夫 " 教授 高 良 宏 明 " 講師 嘉 陽 宗 俊 " 講師 井 上 治
第 6 回	11月 7日	減圧症（潜水病）と高気圧治療	医学部教授 湯 浅 祚 子
第 7 回	11月14日	らいの話	医学部教授 名 嘉 間 武 男 " 助教授 宮 里 肇
第 8 回	11月21日	糞線虫症	医学部教授 佐 藤 良 也 泉崎病院院長 城 間 祥 行
第 9 回	11月28日	沖縄の蚊	医学部教授 宮 城 一 郎 " 助手 富 間 孝 子
第 10 回	12月 5日	中高年婦人の健康	医学部教授 河 野 伸 造
第 11 回	12月12日	沖縄における内因性急死	医学部教授 永 大 盛 肇 " 助教授 大 野 間 吉 " 助手 内 原 栄 " 助手 梶 城 正 " 文部技官 大 城 尚 弘 伸
第 12 回	12月19日	百歳の科学 －長寿県沖縄をさぐる－	医学部教授 鈴 木 信
第 13 回	12月26日	先天性風疹症候群	医学部教授 平 山 清 武 九州大学医学部教授 植 田 浩 司

(ラジオ科目) 沖縄の戦後史

主任講師：法文学部教授 大田昌秀

放送日	放送月日	中心テーマ	担当講師
第 1 回	10月 4日	沖縄戦後史の意味	短期大学部教授 我部政男
第 2 回	10月11日	沖縄戦	法文学部教授 大田昌秀
第 3 回	10月18日	アメリカの沖縄統治	法文学部助教授 宮城悦二郎
第 4 回	10月25日	戦後沖縄の政治 －社会大衆党と土地闘争－	法文学部助教授 我部政明
第 5 回	11月 1日	戦後沖縄の経済政策	琉球銀行調査部長 牧野浩隆
第 6 回	11月 8日	戦後沖縄教育の流れ	教育学部教授 阿波根直誠
第 7 回	11月15日	沖縄戦後文学の出発	教養部教授 仲程昌徳
第 8 回	11月22日	意識に見る戦後沖縄の社会	法文学部教授 東江平之
第 9 回	11月29日	戦後沖縄の新聞と放送	法文学部非常勤講師 保坂広志
第 10 回	12月 6日	戦後沖縄の食文化	教育学部助教授 金城須美子
第 11 回	12月13日	沖縄の基地	沖縄タイムス編集局 國吉永啓
第 12 回	12月20日	沖縄戦後思想史の一断面 －『那覇市長問題』とその波紋－	教養部教授 比屋根照夫
第 13 回	12月27日	戦後研究と「沖縄学」	法文学部教授 大田昌秀

琉球大学

<スクーリング>

(テレビ科目) 沖縄の医療と保健

回	実施場所	実施日時
第 1 回	沖縄本島(琉球大学) 宮古(平良市立中央公民館) 八重山(石垣市立文化会館)	昭和62年 9月20日(日) 13:00~15:00
第 2 回	沖縄本島(琉球大学) 宮古(平良市立中央公民館) 八重山(石垣市立文化会館)	昭和62年11月22日(日) 13:00~15:00
第 3 回	沖縄本島(琉球大学) 宮古(平良市立中央公民館) 八重山(石垣市立文化会館)	昭和63年 1月17日(日) 13:00~15:00

(ラジオ科目) 沖縄の戦後史

回	実施場所	実施日時
第 1 回	沖縄本島(琉球大学) 宮古(平良市立中央公民館) 八重山(石垣市立文化会館)	昭和62年 9月20日(日) 15:00~17:00
第 2 回	沖縄本島(琉球大学) 宮古(平良市立中央公民館) 八重山(石垣市立文化会館)	昭和62年11月22日(日) 15:00~17:00
第 3 回	沖縄本島(琉球大学) 宮古(平良市立中央公民館) 八重山(石垣市立文化会館)	昭和63年 1月17日(日) 15:00~17:00

<再視聴>

実施場所	実施期間・日時
沖縄本島(琉球大学)	第1回 昭和62年11月15日(日) 10:00~16:45 第2回 昭和63年 1月10日(日) 9:00~16:45
宮古(平良市立中央公民館)	第1回 昭和62年11月15日(日) 10:00~16:45 第2回 昭和63年 1月10日(日) 9:00~16:45
八重山(石垣市立文化会館)	第1回 昭和62年11月15日(日) 10:00~16:45 第2回 昭和63年 1月10日(日) 9:00~16:45